

50 赤城信一について（第三報）

○上田智夫・小竹英夫・宮下舜一・吉田 信

明治十九年十二月十六日、赤城信一は押川方義からキリスト教の洗礼を受けた。

押川方義は明治五年にパラーに洗礼を受けた「横浜バンド」の創始者の一人で、東北学院の創立者でもある。室蘭地方では、室蘭郡長田村顕允（旧伊達家家老）、赤城信一（室蘭病院院長）、日野愛憲（旧片倉家家老）などの有力者が洗礼を受け、赤城は室蘭教会の長老として、自宅を教場に開放して教勢の伸展につとめた。

仏教信奉港民の排斥などもあって、明治二十年十二月には室蘭を去って胆振国西紋別村（伊達市）で開業する。伊達在住中も伊達教会の長老として、小会を自宅で開いており、夫妻で三十円を教会建造費として寄進した。

明治二十一年八月二十五日、午後六時臨時小会ヲ赤城

長老宅ニ開ク。

議長 北山。書記 赤城。出席者 田村、赤城長老。

七時半閉会（赤城氏祈禱）

この時期、佐々城本支に室蘭区大字絵鞆の所有地を売却している。佐々城本支は函館戦争当時伊藤友賢を名乗り、赤城とともに函館病院高竜寺分院に勤務しており、明治五年に横浜の基督公会でパラーから洗礼を受けた、戦友で同信の友であった。

佐々城の妻豊寿は、東京婦人矯風会の発足にかかわり、後年日本基督教婦人矯風会の名誉会頭としても活躍した。娘竹子は、国木田独歩と結婚し、その奔放な生き方は、有島武郎の「或る女」の早月葉子のモデルとして知られている。佐々城は一時本籍を室蘭に移しており、豊寿と信子は短期間室蘭に移り住んだこともある。

赤城信一は明治二十二年四月、札幌に出て当初南四条西四丁目に居を構え、同二十三年には南三条西三丁目に移居する。

札幌においては関場不二彦の知遇を得て、北海道医事講談会に参加し、評議員、幹事兼会報編集者を経て、明

治二十四年には講談会の副会頭に選出された。

信一は講談会例会を自宅で開催し、札幌衛生会で「井戸の話」の講話を行ない、二十六年には「歌斯の里患者ノ一例」として、会誌に既往症、現症、治療法を記述した症例報告を行なったほか、医風の振興の為多くの論文をよせた。

同時に札幌北一条教会設立にもかかわり、長老として活躍し、明治二十四年伊達教会が中心となって洞爺湖畔に設立した「北海孤児院」に対して、五十円を寄附している。

しかし年代とともに医家としては医学の進歩におくれゆくのか、明治二十六年十二月にはポン然別（小然別）鉱山に転出する。

広告

医者流行ラス生計困難ニ付単身行脚ト出掛ケ左ノ所ニ駐錫ス

余市郡ポン然別鉱山 赤城信一

この地は北進鉱業大江鉱業所で、もと久原房之助所有の金山で、昭和五十年代には銅、亜鉛、マンガン等の鉱

山となっていた。

やがて信一は病気となって札幌に戻り、明治二十九年二月一日死亡している。享年五十七歳であった。

墓は当初札幌市豊平墓地にありキリスト者の表示はなく、使用申告者は片倉二三子であったが、昭和五十年札幌の鈴木孝二先生（旧片倉家臣御子孫）が、片倉家墓所を札幌市平和の滝霊園に造成した時、旧主の夫人の父ということ、信一の墓を移設合祀して黒御影石の顕彰碑を併設されている。

赤城はまた漢詩をよくし、小稿遺稿六十余編があつて、初稿は文久年間、籠底蘇稿は明治戊辰の乱前後、蘭灣餘稿は室蘭在住当時のものである。

信一の長男赤城麟は明治三十三年若くして死亡し、墓は登別市幌別来馬墓地の片倉家墓所に建てられている。

（北海道医史学研究会）